

異文化間コミュニケーションにおける文化能力養成について

—中国の日本語教育を例として—

陳 岩

ソシュールの構造主義文法とチョムスキーの変形生成文法の影響で、長期にわたって、中国の日本語教育と研究はそのほとんどが日本語の内部形式、例えば音声、文法、語彙に限られていた。しかし近年来、日本語教育のかつてない発展及び外国の新しい文法理論の導入により、多くの日本語教育者は言語の社会機能に目を向けるようになり、しかも以下の点ではほぼ認識の一致をみた。即ち、日本語学習の主な目的は異文化間コミュニケーションを行うことにあり、コミュニケーション能力には言語運用能力と文化理解能力（以下言語能力と文化能力と略称する）が含まれており、文化内容を伴わない日本語教育はもはや完全な日本語教育でなくなった、などの考え方である。小稿では異文化間コミュニケーションにおける文化能力の不可欠性、中日間コミュニケーションにおける主な文化障害、コミュニケーションにおける文化能力養成の基本的内容について、私見を述べてみることにしたい。

一、異文化間コミュニケーションにおける文化能力

言うまでもなく異文化間コミュニケーションは言葉が第一条件である。言語能力が高いほどコミュニケーションの障害は少なくなる。しかし言語問題を解決すればコミュニケーションにおける全ての問題が解決できるとは言えない。異文化間コミュニケーションをスムーズにするには文化理解の障害を乗り越えなけ

ればならない。しかも言語障害を克服することより文化障害を克服することの方が遙かに難しい。実際にはコミュニケーションの中で出てきた不調和、誤解、ないし摩擦の多くは文化能力の足りないことによるものである。

△希望大家喜欢我的歌。

○皆さん、どうぞ私の歌を好きになって下さい。

日本人のお客さんを招待している「文芸の夕べ」で、ある中国人の歌手が歌う前に上記の話をして通訳はその場で日本語に訳した。言語レベルから言えば上の訳は正しいが、コミュニケーションの結果から見るとそれは適切でないと言わなければならない。正しい訳は次の通りであろう。

○皆さん、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

一見すれば一字一字に全て根拠がある訳はなぜ間違っていたのだろうか。その原因はコミュニケーションにおける文化障害を乗り越えることができなかったところにある。中国人はあけすけにものを言うことを好んでいるが、日本人は違う。ものを言う時、日本人は単刀直入の形を用いず、できるだけ断定の口ぶりとはっきりとした賛成、反対を避け、婉曲な方式で意思を表し、自分の見方を人に押しつけないことを好んでいる。上記の適切でないと言われた訳が中国語の表現方式（「我を主とする」方式と言ってよかろう）を用いたので、日本人はそれを聞くと話し手が傲慢尊大、自画自賛する印象を受け、不愉快な思い

をするだろう。それに対して、その正しいとされた訳が日本語の表現方式（「客を主とする」方式と言ってよかろう）を用いたものであったからだ。即ち自分の行為を相手の行為に変え、間接的に、婉曲に自分の意思を表していたので、日本人はそれを聞くと気持ちを疎通させることができるのだろう。上記の通訳の失敗は明らかにその言語能力の原因ではなく、文化能力の原因である。

またある若者がこんなことを私に話したことがある。彼は日本留学の二年の間、指導教官が何回も「今度、家に遊びに来て下さい」と言ってくれた。彼は今日か明日かと待ちに待っていたが、とうとう帰国するまでも先生の家へ遊びに行くことができなかった。このことで彼は自尊心を傷つけられ、指導教官の人柄までも疑うようになった。これは明らかに誤解である。と言うのは指導教官が言った「今度、家に遊びに来て下さい」はごく普通の挨拶語で、中国人知人同士が合う時によく使う「吃饭了吗」（直訳すれば「もう食事が済んだ？」になる）と同じように実質的な意味を持っていないからである。

日本でありふれている「割勘」も中国人に困惑させた例は少なくない。食事を招待されているお客さんの前でも平気で飲食代を計算したり、出したりしている風景はどうもみっともないと言うのである。「割勘」を裏づけとして日本人がけちであるという話はよく耳に入る。しかし、これはまた誤解である。さてこの場合「割勘」はどう見ればよかろうか。まず辞書を引いてみよう。「広辞苑」と「新明解国語辞典」の解釈は以下の通りである。

「広」 （割前勘定の略）勘定を各人に平均に割り当てて支払うこと。

「新」 何人かで食事をした場合に、各自が均等に（注文した分に応じて）代金を支払うこと。

しかし、辞書の解釈はただ「割勘」の概念的な意味に過ぎず、「割勘」の文化的な意味に

少しも触れていない。「割勘」は単に「均等に代金を支払う」だけでなく、豊富な文化的な内包を有する。ある調査によると、「割勘」は日本製の物でなく、アメリカからの舶来品であるそうである。「割勘」という習慣は昭和20年代に日本に伝わってきて、昭和30年代にいち早く広がった。「割勘」は日本人の考えに同調するので、大変受がよかった。第二次世界大戦後、日本がアメリカ式の産業社会へ転換して、消費社会に入るに連れて日本社会に以前にあった義理人情は次第に薄れてきた。人々は真のよしみや永遠の友情をもう求めず、他人と一定の距離を置きたがっている。この変化は交際関係の上で、二つの具体的な特徴を反映している。一つは誰でも相手に義理を欠けたがらないということ、もう一つは情、親切さはただ一時、一つの事だけに限り、その後あるいは外の事にもうかかわりがないということである。だから、全てのことはその場できれいに決済し、けりをつけることが重要である。「割勘」は共同食事に表れているだけでなく、ほとんど全ての共同消費に表われている。もはや一つの「割勘」文化が形成されていると言っても過言ではないだろう。一つのごく普通の言葉なのに、こんなに複雑な文化内容が含まれている。こういうことが分からないと、どうしてコミュニケーションにおける文化のギャップを埋めることができよう。

ある日本経済代表団を歓迎するレセプションの中の出来事であった。ホストとしての中国側の責任者は挨拶の最後にこう言った。「終わりに当たりまして、私は我々の友好の事業がお国の富士山のように、天長地久、永遠に変わる事なく受け継がれていきますよう願っております。」実は挨拶原稿に書かれているのは「…富士山のように…」ではなく、「…泰山のように…」であった。この責任者はお客さんに親近感を持たせるため、とっさに妙案を浮かばせ、「泰山」を「富士山」に

変えた。しかし、こういうふうに変えたのは果して日本人のお客さんに親近感を持たせたのだろうか。さて、「泰山」と「富士山」がそれぞれ中国と日本、二つの異なった言語世界におけるイメージを見てみよう。数千年来、東岳泰山のイメージが中国人の精神世界においてずっと重要な地位を占めており、それはすでに堅固不動、千古不滅の代名詞とシンボルとなっているので、「繆如泰山（泰山のように動かない）」のような言い方が出てきた。それでは日本人にとって富士山はいかがだろうか。富士山が日本人の精神世界で占めている位置はすこしも中国の泰山に劣ることがないと言わなければならない。日本で一番高い山である富士山は標高3776メートルで、日本のシンボルとして、昔から霊山として人々に崇拜されており、代々の文人に詠唱されている。しかし、富士山はかつて大きな噴火があった活火山である。その山頂にはいまも直径約800メートルの火口が残っているので、「千古不滅」のイメージを持つことはない。日本語には「富士の山を蟻がせせる」のような言葉があるが、総じて言えば富士山が日本人に与えるイメージはやはり神聖さ、気高さ、綺麗さであろう。このため、「天長地久」の「友好事業」を富士山に譬えたのは分相応ではないかと思われる。

以上の事例で筆者の見方が、すでに証明されたと言えるだろう——コミュニケーションを行うには是非とも文化能力が必要であり、これからの日本語教育では文化能力の養成に力を入れなければならない。

二. 中、日コミュニケーションにおける主な文化障害

異文化間コミュニケーションにおける文化障害は双方向的であるが、中国人にとって中日間コミュニケーションでの文化障害は主にコミュニケーションの相手の文化、即ち日本文化の理解度から生ずるものである。ここでは

以下で日本文化からの障害を主として論じるが、問題をはっきり説明するため、中国文化と比較しながら述べることにする。

1. 語の文化的意味に関する障害

言語は文化のキャリアーであり、文化を反映し記録し貯蓄しており、また文化の広まりを可能にさせる。文化が言語の各層に反映されているものと見ている人がいるが、一致した見方では言語という符号系統において、語は文化の影響に一番敏感な層である。ここに言う語とは一つの言語の語の全体の総和を指し、接続詞、連語、成語、諺語、格言などが含まれている。一般的な見方では語の文化的意味は民族に特有な文化的意味と民族の違いからくる連想的意味が含まれている。叙述の便宜のため、四つの面に分けよう。

A 連想的意味

事物の属性に対する見方が違うので連想的意味は当然異なってくる。例えば、よく例と引かれた「亀」は日本では長寿を意味し、中国では「緑帽子」（妻を寝とられた亭主をあざけってという言葉）になってしまう。また「牛」に対するイメージも中国人と日本人とは異なる。中国人の牛に対する見方では頑固で機敏でない一面があり、そしてこれによって「牛脾气・牛性子（頑固で強情な性質）」のような貶詞も派生してきた。しかし総じて言えば牛に対してやはり忠実でまじめである、苦しみやつらさを堪え忍ぶ、黙々と働くという印象である。そして「老黄牛（こつこつ大衆に奉仕する人のたとえ）」、「孺子牛（同「老黄牛」）、「拓荒牛（開拓者）」などの褒詞も出てきたし、しかも人をほめ自分を励ますのによく使われている。例えば「老牛亦知夕陽晚，不待揮鞭自奋蹄（老いたる牛も夕陽の短さを知りて、鞭打ちをされずに自分で蹄を奮い起こす）」のような詩句がある。さて、日本人は「牛」に対してどういう印象を持っているだろうか。ほとんどの日本の国語辞典

に牛についての解釈に「力が強い」があるが、しかし筆者の調べ出した牛から派生してきた20の成句の中に褒詞が一つもなく、大部分が貶詞である。例えば「牛と芥子は願いから鼻を通す」「牛に食らわる」「牛の歩み」「牛の籠抜け」「牛の角を蜂が刺す」「牛の涎」「牛を馬に乗り替える」などである。ここから日本人の心で牛は愚かさ、不器用さ、のろさのシンボルであることが分かる。

同じ体格が立派で、力が抜群である牛は中国と日本での受けがなぜこんなに違っているだろうか。私なりの推測と仮想を試みよう。例えば中国ではとても長い農耕社会で牛は犁を引き、車につき、人と互いに頼り合い、悔いも恨みもなく懸命に働き、人間の信頼できる仲間になっていた。マルクス主義、社会主義の公僕精神が中国で広まるにつれて牛の肯定的なイメージは一層強化された。これに反して、日本人は島に住み、魚介を食べているので、牛の恩恵をそんなに切実に感じたことがないだろう。あるいは牛の性格は「花は桜木、人は武士」を尊ぶ日本の国民性とはまったく相容れないかも知れない。だから、「牛」は日本人の心で否定的なイメージになった。

B 比喩

比喩は連想から発するものである。比喩に表れた主な障害が「喩体(たとえるもの)」である。それは長期にわたる言語生活の中で形成されたもので、強い文化色彩、民族色彩、時代色彩、地域色彩を持っている。例えば、日本語では「金づかいがあらさま」を「お金を湯水のように使う」と譬える。「湯水」という「喩体」は正に日本の独特な地理環境と生活様式の中に生れたものである。日本には火山がとても多く、主なものは150もある。多くの火山より、日本にはいたる所に温泉ができ、利用できる温泉だけでも2000余りに上る。温泉は日本人にとっていくら取ってもどれだけ使っても尽きることのない富で、思う存分に楽しみ、惜しまずに使うことができる。

これに対し、中国語ではよく「金づかいがあらさま」を「揮金如土」(お金を土のように使う)と譬える。「土」が「喩体」になるのは当然中国大陸の広々としたことに繋がりがあがる。たぶん、古代中国人は土がいくら取ってもどれだけ使っても尽きることのないものであると思っただろう。また、中国語は「ギョウザを茹でよう」で人の多いことを譬え、日本語は「芋を洗うよう」で譬える。この二つの「喩体」はそれぞれの飲食文化から来ていると言えるだろう。ギョウザが中国の広い地域における伝統的な家庭食品で、茹でる時、水面でおしあいへしあう状態から「煮餃子(ギョウザを茹でる)」という「喩体」が造り出された。日本では「水ギョウザ」はまだ家庭までに普及されていない。しかし、日本人が芋を洗う方法はとてもユニークなもので、桶に芋を入れ、水を入れて棒でかき回し、当然おしあいへしあう状態にする。

中国は牧畜文化、内陸文化であり、日本は海洋文化、稲作文化であると言う人がいるが、これは比喩からその跡形が探れる。

「瘦死的骆驼比马大」(瘦せて死んだらくだでも馬より大きい)／「腐っても鯛」

「抛砖引玉」(煉瓦を投げて玉を引きよせる)／「蝦で鯛を釣る」

「姜还是老的辣」(ショウガはやはりひねたのは辛い)／「亀の甲より年の功」

中国の家畜、煉瓦、姜、日本語の魚、蝦、亀はそれぞれの文化の色彩を代表している。

「背靠大树好乘凉」(背中が樹の大木にもたれて気持ちよく涼をとる)／「大船に乗ったようだ」

言い方は違うが、表出した心境は同じである。しかし、文化環境が異なる。一方は正午の烈日の下で草を鋤く者が木陰で一服できる満足感で、他方は激しい荒波に出入りする漁夫が大きな船に乗る安堵である。

C 特有な言葉

民族文化に特有な事物を表す言葉として、

「文化語」「文化局限語」「国情語」とも言われるものがある。例えば、中国語の「臭老九」⁽¹⁾「五七工厂」⁽²⁾「民办教师」⁽³⁾「农转非」⁽⁴⁾「春运」⁽⁵⁾「希望工程」⁽⁶⁾など、日本語の「下宿」「高麗犬」「茶の間」「上り框」「書院造り」「藪入り」「丑の刻詣り」などがそれである。異文化における人にとってこれらの言葉は至難なもので、対応できる語がなかなか見付からない。例えば、「丑の刻詣り」はただ「丑時退呪」と訳すと、その意味が分からない。「嫉妬深い女がねたましく思う人をのろい殺すために、丑の時（今の午前二時頃）に神社に参詣すること。頭上に五徳をのせ、蠟燭をともし、手に釘と金槌とを携え、胸に鏡をつるして、のろう人を模したわら人形を神木に打ち付ける。七日目の満願の日には、その人が死ぬと信じられた。」とのように解釈を加えなければならぬ。筆者は日本人に中国語を教えている中でこんな言葉にたびたび出会った。例えば「你家有什么人？」はその一つである。最初、「ご家族にはどなたとどなたがいますか」と訳したが、どうも日本語らしくないので、日本人の先生に聞いてみた。しかし、いい訳は教えてもらえなかった。というのは日本語にこういう言い方自体もないからである。日本語では「ご家族は何人ですか」は言うが、家族構成まで聞かないというのである。仕方がなく、「ご家族の構成はどうなっていますか」と訳すことにした。

D 忌み言葉

中国語と同じように日本語にも不吉とされ、使用を避け、あるいは他の言葉で置き換える言葉がある。例えば「葦」(あし)は「悪」と発音が同じで「よし」で取って代わる。「梨」(なし)は「無し」と発音が同じで「ありのみ」で取って代わる。「死ぬ」は直接に言わず、「なおり」で取って代わる。日本語で忌み言葉は以下のように大別することができよう。

一般的な忌み言葉

播り鉢→当たり鉢, 硯箱→当たり箱

塩→波の花

特殊な業種の忌み言葉

水→わっか, 米→くさの実, くま→山のおやじ(狩人), 蛇→ながもの, 鯨→えびす(漁民)

特殊な場合の忌み言葉

結婚祝いに去る, 死ぬ, 離れる, 滅びる, わずらう, 帰る, 飽きる, 重ねる, 再三, 再度, またまたなどを言ってはならない。

出産祝いに浅い, 死ぬ, 滅びる, 破れる, 流れる, 散れるなどを言ってはならない。

新築祝いに煙, 水, 赤, 飛ぶ, 流れる, 壊れる, 焼ける, 倒れる, くずれる, 燃える, つぶれるなどを言ってはならない。

病気見舞・災害見舞いに再び, また, 追って, かさねがさね, かえすがえす, 重ねるなどを言ってはならない。

誕生日祝いに死ぬ, 病, 枯れる, ぼける, へこたれる, 倒れる, 萎える, 衰える, まいる, 朽ちるなどを言ってはならない。

2. 言語マナー・言語習慣の障害

言語マナー・言語習慣の障害は呼び方, 挨拶, 紹介, 訪問, 招請, 接待, 拒絶, 質問, お詫び, 感謝, 称賛, 抗議, いとま請いなどの社会の場での言葉の用法である。日本語ではこれらの用法を細かく緻密に区別し、ほとんど全ての場合に決まりがある。中日両国の文化背景が異なり、言葉の使い方も同じでないで、コミュニケーションの中では、身分や場合柄にふさわしくない言葉の使用による失敗がしばしば出てくる。観察によると、異文化間コミュニケーションにおける失敗の多くは語用の層で表れる。例えば日本語の呼び方語として「先生」「さん」「様」などの接尾語があるが、われわれ中国人はよく日本語を中国語に当てはめ、「先生」が最高の尊敬語であると思い、相手の身分などを区別せず、一律に「先生」と呼び、よく日本人を困惑さ

せる。実際には「先生」は尊敬を表すが、使う範囲が限られている。学校の先生、医者、議員、芸術家などにしか使えない。いくら大きな、有名な会社の社長であっても「先生」と呼ぶべきではない。日本人をむやみに「先生」と読む人の中に、上述のわけが分かる人もいるが、しかし彼らは習慣的に頭の中の根強い中国文化で日本語を理解し、「先生」と呼ばないと、失礼になるのではないかと思っている。また、日本人は断る時に中国人のようにあけすけに言うのではなく、遠回りで、婉曲な言い方を用いる。例えば「それはちょっと…」「さあ、ちょっと…」などはそれである。こういう話を聞いたことがある。ある中国人の学生は日曜日の朝に日本人の先生に電話をして寄宿舍までお伺いしようと言った。その時、日本人の先生は「さあ、ちょっと…」と答えた。これを聞いて中国人の学生は「それなら夜はいかがでしょうか」と聞きただした、という話であった。日本人の先生が言った「さあ、ちょっと…」はほんの少しの要事があるという意味ではなく、断る言い方である。中国人の学生はその本当の意味が理解できずに、コミュニケーションの失敗になった。小稿は呼び方、挨拶、紹介などの決まりと用語をそれぞれに紹介しようと思わないが、巨視的な角度から日本語の言語習慣の主な特徴を簡単に紹介する。

A 断定を暈す

相手の立場を配慮し、自分の主張、見方などを断言せず、あいまいな方式で表す。これは「暈しの作法」と言う人がいて、言語習慣でもあれば、言語マナーでもある。常用の文型には「…と思う」「…と考える」「…らしい」「…ようだ」「…みたいだ」「…かも知れません」などがある。

B 婉曲な拒絶

余地を残すという説明で拒絶を表す。この方法は断る目的を達すばかりでなく、相手の自尊心も傷つけない。常用文型には「今度に

しましょう」「(前向きに)考えておきます」などがある。

C 逆方向の禁止

禁止を明言せず、話者の頼むという形で表す。相手を主動的な立場に置かせ、その気持ちを悪くさせない。常用の文型には「ご協力をお願いします」「ご遠慮下さい」などがある。

D 省略・暗示

摩擦や不快な思いを引き起こさないように、会話中、双方が十分のみこむことや相手に刺激をさせることを省略したり、暗示という方法で相手にその内容を理解させる。この方法はよく拒絶、禁止を表すのに用いる。「確かに…ということは言えるでしょう。しかし…」「おっしゃる通りかも知れませんが…」「それはちょっと…」「まさか…」「別に…」などがある。

E 謙遜、煽て

自我謙遜と相手を煽てることは日本文化を体現する言語習慣の一つである。謙遜を表す言葉には「つまらないものですが」「何もありませんが」「ささやかですが」「恐れ入りますが」「恐縮です」などがあり、煽てを表す言葉には「すばらしい」「かわいい」「きれいですね」「おうつくしい方ですね」「素敵」「ご立派ですね」などがある。

3. 非言語行為の障害

ある学者の指摘では面と向かって会話する中、言語によって伝達する情報はただ30%で、残りの70%は主に非言語行為によって伝達する。非言語行為は少なくとも時間言語、空間言語、身体言語、声の制御、環境の要素など五つの面が含まれる。中日両国は共に東方文化圏に属しているが、非言語行為の面で異なるところがある。次に身体言語(ボディランゲージ)を例として簡単に説明しよう。

握手は親切さと友好の感情を表す非言語行為として中国ではきわめて普通のことであり、

日本では特定の場でしか適用しない。日本人は互いに挨拶しあう時、普通体と体が接触せず、即ち握手せずにお辞儀をする。お辞儀は立つ式と坐る式に分かれている。立つ式は、両足を直立にそろえ、上半身をかがめ、頭をさげる。軽くなすくから腰を90度かがめるまでであるが、尊敬の程度によって腰をかがめる度合いが決められる。坐る式は畳の上に坐り、両手を地面に着かせ、頭をさげる。上述のように日本人の握手は特殊な場合に限られている。例えば日本人と外国人、立候補者と有権者、芸能人と観衆である。

日本では「○」「×」が代表する意味は中国のと基本的に同じであるが、手まねは異なる。「○」は正しい、合格、勝ち、OKなどのプラスの意味を表し、「×」は間違い、不合格、敗北、だめなどのマイナスの意味を表す。「○」の手まねをする時、親指と人差し指で○の形をしてもよいし、両腕で頭上で○の形をしてもよい。「×」の手まねをする時、両手の人差し指で×の形をしてもよいし、両腕を頭上で交差して×の形をしてもよい。

日本人は「それは私だ」「私?」を表す時、人差し指で自分の鼻を指す。めでたい時や嬉しい時、長久を祈る時に万歳を唱える時、両腕を頭上に高く振り上げる。怒りを表す時、両手の人差し指を出して額の両側に置く。

数多くの日本語研究者は日本語の習慣からその文化のルーツを探り、日本文化の特徴についていろいろな見方を出している。例えば「耻の文化」「沈黙の文化」「ウチとソトの文化」「たて社会の文化」「気の文化」「謙虚の文化」「煽ての文化」「察しの文化」「以心伝心の文化」「集団性文化」などである。それぞれの見方がみなある程度の理屈に合っているが、全体から見れば日本人の思考・心理・言語方式及び行動パターンを定めるのはやはり「内と外を区別する」意識である。古来から、日本人ははっきりとした「内と外を区別する」意識を持っており、自分の周囲に輪を

作って「内」と「外」を区別する。輪の内にいる人を親しく扱い、輪の外にいる人を疎く扱う。しかも親しさと疎さの程度についても、相手に応じて微調整を行っている。例えば、日本語の人称代名詞は非常に発達し、一人称と二人称に多くの単語を持っている。

第一人称 わたし、私、あたし、あたい、おれ、てまえども、てまえ、僕、我輩、わっし…

第二人称 おまえさま、おまえさん、おまえ、おめえ、あなた、あんた、てめえ、きさま、君…

人称代名詞が発達するのは日本人の「内と外」「親と疎」を区別する意識を反映している。人と付合う中で、慎重な選択を経て分相応の人称代名詞を使う。

上述の「内と外を区別する」説は日本語の全ての語現象を解釈することができそうである。しかし小論の目的ではないので、具体的な説明は省くことにしよう。

三. コミュニケーションにおける文化能力養成の基本的内容

1. 学習者の国際的意識を養成する。

21世紀は疎通、交流、合作、発展の時代であり、異文化間コミュニケーションがグローバル化される時代である。地球はもはや人類が群居する村になる。異なった肌色の、異なった言語の、異なった文化背景を持つ人々が村民のように共に生き、共に働く。このような変化に応じて、人々は新しい意識——国際的意識で自分の頭を武装させねばならない。国際的意識というのは地球に生きる人が持つべきグローバル社会の一員であるという意識である。例えば、中国人はアジアにおける中国人で、アジア人は世界におけるアジア人である。20世紀は人類の数多くの夢を実現させたが、しかし少なからぬ遺憾を残している。例えば環境の破壊、エネルギーの枯渇、人口爆発、貧富の不均衡などである。これらの問題

はすでに人類の生存と発展を脅かしている。しかも、これらの問題の解決は一つの地域・国家だけで出来ることではなく、全地球的範囲に渡る努力が必要である。この意味から言えば、国際的意識というの是一种の覚醒め意識・危機意識・前衛意識であり、一種の国家・民族・社会・文化を超越した地球的角度から物事を考えるグローバルな意識であろう。

2. 学習者の多国文化知識を養成する。

21世紀にわれわれが直面するのは地球全体及び数多くの国家・民族の人々である。このため、他国文化、とくにコミュニケーションをする相手の国の文化を知らなければならない。文化の定義は百以上もあるようだが、この点からそれを概括するには、難さが窺われる。文化がどのように定義されるにしても、それを「有形文化」と「無形文化」に大別することができよう。「有形文化」について、例えば日本の茶道、華道、歌舞伎、能、相撲など、学習者は書物や新聞、テレビ、映像教材などで認識し理解することができる。しかし「無形文化」に対する認識と理解はそう簡単なことではない。

ここで、「無形文化」に定義を下そうとは思わないが、その内容について、いくつか列挙することはできる。例えば、社会が持っている人間の価値観であるとか、行動の仕方であるとか、意味機能の体系のようなものなどがそれに入るだろう。「無形文化」に対する認識と理解は、単に書物を読むとか、行動の仕方を模倣するとか、教えられることなどによるものではなく、コミュニケーションの相手と直接の交流の中で、観察——探り——味わい、そして最後に自分なりの価値判断をすることで形成される。

3. 学習者の異文化に対する寛容な態度を養成する。

グローバル経済が世界を国境のない社会に

しようとしている。だが、異なる地域、異なる民族の間の差異がすぐなくなることを意味する訳ではない。異なる文化伝統、言語、宗教などがあってこそ、世界は多様多彩である。地球共通の文化と言語を創るには長期間にわたる育み、発展が必要で、けっして一朝一夕に出来るものではない。世界は長期にわたって多元文化共生の時代となるだろう。異文化とのぶつかり合いの中で、われわれは文化の多様化と価値観の多様性を認め、尊重し、自国の文化に誇りを持つと同時に、また他の文化伝統を知り、楽しむべきである。コミュニケーションの中で、文化摩擦が起こる時、自国の文化背景にもとづく思考方式、行動パターンなどで簡単に相手の言動が正当か否か、合理的か否かを判断することは禁物である。

4. 学習者の異文化に対する科学的な立場を養成する。

文化は多種多様、千差万別なもので、共時性を持つし、通時性をも持つ。同一時代には、地域、性別、年齢、職業などの違いによって異なる文化内容が表され、異なる時代には、文化の差異がもっと顕著となる。この点に必ず十分な注意をはらい、それぞれの国の文化を区別し、対処するだけでなく、一つの国の文化に対しても実際に即して分析し、軽率と独断を避けるべきである。

5. 学習者の多文化、大文化の視野の中で、自国文化、相手国の文化を位置づける研究方法を養成する。

いかなる外国語・外国文化を学習する場合にも、目的は、つまるところ、自分の国の文化を見直すことにある。日本人の学者別宮貞徳氏も「すべての外国語・外国文化の勉強は、日本語・日本文化の見直しにつながるもので、またそうでなければ豊かな実りを結ばない。」という同じようなことを指摘している。自国の文化と相手国の文化、あるいは他国の文化

との比較を通じて、自国の文化を見直し、その共通点と相違点を見出すことが重要である。

6. 学習者の異文化に適應能力と対処技術を養成する。

この点はますますその重要性を増してくるだろうと思う。聞くところによると、EU加盟国の諸大学の学長会議が出した声明文中で、これからヨーロッパでは三つの言語を習得させることを目標に若者を育てる、といった内容がある。われわれ部外者から見ると、ヨーロッパ諸国というと、その根幹において、歴史的に共通なものがあると思われる。即ち、文化においてキリスト教文明といったものを共有しているので、相互理解も比較的容易ではないかと思える。だが、必ずしもそうではないということである。そのために、ヨーロッパ人たちでさえ一生懸命、文化に対する相互適應の措置をとっているわけである。

[注]

(1) 臭老九

9番目の鼻つまみ者。文革期にインテリに対して用いられた蔑称。

(2) 五七工厂

文革期、毛沢東の「五・七」指示によって創られた町工場。

(3) 民办教师

国家公務員でなく、町・村などから給料をもらう「民営学校の教師」。

(4) 农转非

農村部の戸籍を都市部の戸籍に変えること。(中国の現行の戸籍制度は、住民を「農業人口」と「非農業人口」の二つに区分する。)

(5) 春运

春節(旧正月)期の輸送。

(6) 希望工程

希望プロジェクト。中国青少年發展基金会在1989年始めた、社会募金による貧困地

域の失学の少年を助ける事業である。

[参考文献]

- 陳 岩 「文化と翻訳」 日語学習と研究 (1994. 3)
- 陳 岩 「日本語教学の文化導入について」 外語と外語教学 (1997. 4)
- 陳 岩 「'国際型' 外国語人材についての文化的思考」 外語と外語教学 (1998. 9)
- 陳 岩 「文化理解能力-21世紀外国語教育の重要な目標」 外語教学と研究出版社 (1999. 8)
- 日本国際文化フォーラム 「国際文化フォーラム通信」 (P34. 35)
- 大野 晋 「日本語の文法を考える」 岩波新書 (1987. 3)
- 別宮貞徳 「翻訳読本」 講談社現代新書 (1979. 4)
- 陳 岩 「漢日最新中国語詞典」 大連出版社 (1996. 4)